

## 「仙台文学館」レポート

1999年オープンの施設・現況レポート

## 仙台文学館

## 【目次】

1. はじめに
2. 事業・運営に関して
  - 1) 文学館とは
  - 2) 整備の経緯
  - 3) 主旨は資料の収集・保存と情報発信
  - 4) 緑の中の立地
  - 5) 運営
  - 6) 展示
  - 7) 集客施策・企画展
3. 訪問してのインプレッション
  - 1) 外観
  - 2) 2階 エントランス・交流コーナー・情報コーナー
  - 3) 3階 常設展示室
  - 4) ミュージアムグッズなど
4. まとめ

## 【施設概要】

- 交通  
市営地下鉄台原駅下車 遊歩道を通り徒歩20分  
バス 市営バス・宮城交通バスとも北根二丁目・仙台文学館前バス停下車
- 開館時間  
午前9時から午後5時（入館は午後4時30分まで）
- 休館日  
月曜日（休日の場合は開館）  
祝日及び振り替え休日の翌日（休日の場合は開館）  
月末日、12月28日～1月4日
- 入館料  
常設展示室観覧料  
一般・大学生400円（団体320円） 高校生200円  
（同160円） 小・中学生100円（同80円）※特別  
展示観覧料は別料金

URL <http://www.lit.city.sendai.jp/hp/index-sml.htm>



## 1. はじめに

1999年オープンの施設レポート、第一弾は仙台文学館（同年3月開館）である。博物館のジャンルにおいて、「作家」の足跡と作品の世界を再現するような専門性の高い施設はともかく、「文学」という芸術ジャンルそのものを見せるのは、非常に難しいのではないかと考えていた。実際、ある一人の作家を扱った個人資料館的位置づけのものか、研究者向けの学術目的の施設が多数を占めている。美術館なら作品を展示するだけでも鑑賞の喜びを与えられる。しかし、文学作品は書籍となってその世界が出現する。従ってその作品世界にふれたいのなら、とにかく書籍を収集し、提供すればよい。つまり、図書館で事足りることになる。

文学館の場合は、書籍というメディアを通さずに、その作品が表現する世界や作家の感性を具体化しなければ他に何の魅力が訴求できようか？この仙台文学館は、仙台ゆかりの文学者を対象に、作家の足跡と求めた表現世界を市民に広く開放する

という、文学館らしいコンセプトを具現していると聞き、そのコミュニケーション訴求の斬新性に期待して取材させていただいた。

[同館のホームページ](#)には、館長である作家の井上ひさし氏が開館に寄せた言葉が掲載されている。一部を抜粋して紹介させていただくと「…仙台は多くの文学者を受け入れ、育て、作品を生み出す力を与えてきた地。まちの中にはさまざまなかつての文学的な出来事が眠っています…（中略）仙台のそんな『文学的記憶』を掘り起こして、生き生きと皆さんの前によみがえらせる場、それが仙台文学館なのです。きっと文学の魅力をあらためて味わうと同時に、仙台の文化の流れを感じていただけたと思います。また仙台文学館ではさまざまな企画を通して、「見に来る」だけの施設ではなく、『集まって何かをする』施設を目指しています。（中略）お互いに刺激し合い、『何か新しいことをやろう』という“熱”みたいなものが出てきて、そこからまた新しい仙台の文化が発展していくはずです。（中略）緑豊かな環境にあるこの建物は心のゆとりを取り戻すため『ぼうっとする』のにふさわしい場所です。（中略）仙台文学館の主人公は偉大な文学者でもなく、文学作品でもありません。訪れる皆さん一人ひとりのものです。どうぞこの文学館を愛してください。多くの方が集まって使うことで文学館はどんどん輝きます。使い込んで使い込んで、いつかキラキラと底光りするような、そんな仙台文学館を一緒に作っていきましょう。」とある。

氏の文章表現はもちろんだが、文化発信に対する熱いメッセージに感銘を覚える。文学とは決して学問ではない。人間の心が文字となり、文節そして文章にふくらんだ表現芸術であるはず。だから郷土の文化は歴史や民具だけではなく、文学もまた土地の記憶を想起させてくれる。

仙台文学館では、それを実証し、そして市民が文学体験をきっかけとして新しい文化発信を繰り返しているのかもしれない、そんな期待が膨らんだ。

前書きが長くなってしまったが、とにかく私は同館への訪問をとっても楽しみにしていたのであった。

[次へ](#) 



空間  
通信  
[トップ](#)

## 「仙台文学館」レポート

## 2. 事業・運営に関して

## 1) 文学館とは

まず、文学館についてその位置づけを整理してみた。そのネーミングはまだ歴史が浅く、東京・駒場にある日本近代文学館が設立準備段階であった1962年に初めて登場した言葉である。同館の開館は1967年であるから、“文学館”としての歴史はわずか33年ということになる。

施設としての目的は「散逸の甚だしい近代文学関係の資料を収集・保存するため」（[日本近代文学館ホームページ](#)より）であるが、当初は図書館の一部機能を拡大・発展させたものであったようだ。

前述のように、集客空間あるいは博物館としては、「文学」のありよう・価値・意義・時代性といったものを空間において広く一般に見せる役割を果たす。そこで、読書という体験機会の提供が目的となる図書館との差別化が必要になる。ゆえに、主たる目的を「資料の収集・保存」に求め、書籍の収集・貸し出し機能を果たす図書館とは自ずと違った役割を果たすことになる。

正面ゲート。



現在、日本には文学館が約400館あり、その多くは「総合型」と「個人にスポットを当てた資料館」に分けられている。圧倒的に後者の形態をとった施設が多いが、仙台文学館は前者の「総合型」である。県・市などの大きな自治体が運営する文学館は「総合型」が多く、町・村または民間が運営するものは「個人資料館」の色の強い施設が高い割合を占める傾向が見られる。

ちなみに、大都市には図書館が数多く存在するものだが、仙台市では昭和55年頃までは「図書館一館体制」、つまり、公共の図書館が一館しかなかったのだ。しかし、通勤族の増加などで都市化が進むと、図書館が少ないという苦情が多数市に寄せられるようになり、政令指定都市になってやっと区ごとに図書館ができたという。

## 2) 整備の経緯

仙台文学館は事業主体は仙台市である。宮城県の整備事業補助金交付を受けて建設された。宮城県には早くから文学館の設立が要望されていて、現在も多岐に渡る芸術分野の振興活動を続けている宮城県芸術協会が設立された昭和39年の時点ですでに構想があったという。一方、仙台市でも独自に文学館の整備計画案が昭和62年に浮上し、準備委員会が発足していた。県と市の両方に文学館を設立する必要はないため、計画を一本化し、建設主体は仙台市、建設費及び開館までの資料購入費の2分の1を県が補助をするという形で開館することに落ち着いた。

## 3) 主旨は資料の収集・保存と情報発信

仙台文学館は、事業の柱として1. 文学資料の収集・保存 2. 調査研究 3. 展示 4. 普及・啓発の大きく4つの項目をあげている。

まず第一義は、郷土の文学資料の収集・保存である。これが以前から文学館設立の要望が根強かった要因でもある。というのは、個人所有のままだと、貴重な資料が散逸してしまう恐れがあるからだ。収集した資料の調査・研究が行われ、場合に

よってはさらに資料の収集を行う。すると、収集資料類と調査研究の成果の展示が必要となる。これに講演会などのイベント、加えて広報・普及を行い、地域の文学的土壌の育成・普及・啓発活動を行う。

このように仙台文学館は、資料の収集と保存の機能をベースとして、そのコミュニケーションを活発化させる場所なのである。

#### 4) 緑の中の立地

青葉区北根地区は地下鉄延伸とともに宅地開発が進んだ地域で、元々は山だったエリアである。同館は広大な「台原森林公園」(約63,000㎡・東京ドーム約1.3個)の中にある。ここは国有山林地をそのまま公園化し、仙台市が管理している自然公園で、文学館を入口とする遊歩道は公園の奥の方まで続いている。

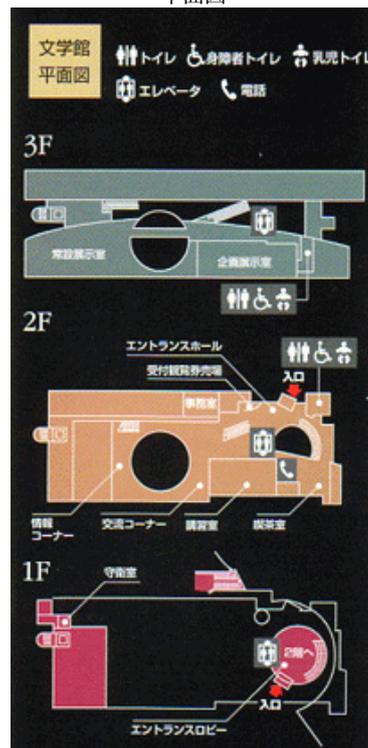
この立地に関しては、特に文学とゆかりのある場所ではない。市街地に立てるか、緑の深い場所に作るかの選択で、同時期に市の中心部に「メディアテーク」という情報センター施設が作られることもあり、文学館の方は自然環境が豊かな場所にしたということだ。

文学館と遊歩道が整備された敷地は、峡谷の形状で、文学館はその地形を活かし、谷へ橋を架けたような外観になっている。設計はコンペを通して、株式会社ネオタイド建築計画が手がけた。

そのコンセプトには、森と庭園への入口として、また自然と都市との境界に立って都市化の波から自然を守る防波堤としての意味を持った「ゲートの役割」、谷間という地形を生かし、自然との調和を考慮して散策路の中の「ブリッジ」、仙台の城に使われ、自然との対比を表現した「白壁と石積み」を挙げている。

建物は3階建てで、1階は円形のエントランスロビーのみ、そこから螺旋状の階段を上った2階に情報コーナー、講習室、交流コーナー、資料室、喫茶などの主要機能が配置されている。山谷形状ゆえ、実はこの階からも入館できるように、エントランスホールと受付、券売機、コインロッカーが用意される。こちらがメインのゲートなのである。そして3階には常設展示室と企画展示室が配置されている。

平面図



[次へ](#) 



空間  
通信  
[トップ](#)

## 「仙台文学館」レポート

## 5) 運営

文学館は、館長以下15名のスタッフで運営されている。学芸室の9名のうち、学芸員資格を持っているのは6名で、全て女性である。これは、何も女性だけに限定して募集した訳ではなく、結果的に採用試験に残ったのは全て女性となったという。

開館に際して、神奈川県「日本近代文学館」と東京・世田谷区の「世田谷美術館」をはじめとする文化活動を参考とした。「日本近代文学館」は、大規模な文学館としての草分けであり、名実ともに日本最大の施設である。いわば、目標である。そして世田谷区に関しては、活動の中身が「いい線いっている」ので参考にしたという。「いい線」とは、世田谷は文化・社会分野でのトップクラスの人々が在任している土地であり、住民にも文化的土壌が成立している。つまり民度が高いわけだ。そのためか、行政が企画するさまざまな文化イベントにも熱心な参加がある。そうした活動を見習うべきと評価しているためだ。

なお、文学館は仙台市の場合は政令指定都市に移行した際に、それまで教育委員会が所管してきた文化行政を市庁部局に移した。そのため、文学館は市庁部局の市民部文化振興課が担当している。

## 6) 展示

常設展示は基本的に仙台ゆかりの文学者を対象とする。収集・保存は、本来由来を重視すべきで、例えば仙台で太宰治の貴重な資料を持っているよりは青森県の文学館が所有するべきである、という考え方である。よってここでは、宮城、仙台という地域性を考慮している。

文学の展示訴求は難しい。小説の有名なフレーズが書かれている初版本のページを展示しても、それで作品の中身や素晴らしさが伝わるというものではない。やはり作品を知った上での資料鑑賞が望まれる。仙台文学館は新しい、いわば後発の文学館であるため、この課題に対しての解決を各地の先行文学館取材するなどして模索した。その結果、文学は最終的には読まなければ理解できない、興味が湧かなくてもそれはそれでしょうがない、と割り切っているという。

公共施設であるため内容の間口を広くする（つまり、やさしく誰でもわかるようにする）のが展示の基本となるだろうが、文学という性格上、ある程度の知的レベルが必要なのは当然であろう。文学館に自らが足を運び、興味を持った人々をターゲットとし、その人たちに満足してもらう展示に落ち着くのはしかたがないことだろう。とはいえ、市の施設という性格から、そうもシンプルに割り切れていない。「専門性と普遍性のバランス」をどうとっているのだろうか。

そのため、深い知識を求める方には、学芸員が説明するのはもちろんのこと、展示室内に机と椅子を設置し、その上にバインダーを置き、グラフィック展示では説明しきれない情報を公開している。興味のある人は座ってじっくり読んでもらうようにしているようだ。それでも、初心者から研究者レベルまでカバーしよう、というのは無理だというのが本音のようだ。

展示しているのは基本的にはレプリカである。芸術とは違い、文学の分野ではレプリカを展示するのが主流になっている。最近は本物かレプリカかという区別を付けない傾向にあり、レプリカであっても「複製品」という文字を入れないところも増えているようだ。確かに展示している初版本が本物であろうと、複製であろうと、受ける印象や伝わってくるものはさほど変わらないのかもしれない。しかし、

常設展示室の様子。



とかく人は「本物」「実物」を見たくなるものである。作品を読むのは文庫本だったとしても、文学館に初版本の実物展示を要望するのは当然の心理のだろう。そこで、レプリカといっても、作成にはそれなりのコストがかかり、その予算をなかなか捻出できない一方で、本物を見たいという要望に応えようと、他館と比べると本物の展示を増やす努力をしているようだ。

展示内容の解説は、長文の文章は読む気が失せてしまうので、200字以内に抑える、来館者の中心である高齢者向けに字を大きくする、などの配慮がある。文学館に文章を読まない工夫を余儀なくされる。これが日本の現在の国語レベルなのである。

展示物は、交替がしやすいように特殊なクロスを壁面に貼り、展示物にマジックテープを付け、スタッフ自らが貼り替えられるようにしている。

来館者に対しては、自由に意見を寄せてもらえるようにと、専用のアンケート用紙を設置している。その中で苦情として、天井まで展示しているので首が痛くなる、展示物が見にくい、という声があったという。また、展示室にトイレの音が聞こえてきて気分が台無しになった、という声もあったようだ。

椅子に座ってじっくりと見られるバインダー。



## 7) 集客施策・企画

オープンからすでに1年半経っているにもかかわらず、仙台市民への認知度が低いのが悩みだという。広報活動に関しては、仙台市関連の広報誌などの媒体のほか、特別展についてはマスコミの取材、共催企画展の場合には地元のラジオやテレビにCMを流すなどの施策を行っている。しかし、現時点では文学館ができたことは知っていても、どこにあって何をしているのかがはっきりと認知されず、結果として行ったことがない人が多数派という状況だ。「文学館」というネーミングの堅さに、市民が敷居の高さを感じているのではないかと同館では分析している。

来場者数の目標は5万人程度を想定している。99年はオープニング効果もあって、5万人は超えたが、今年度は難しい状況である。仙台の場合、11月から3月の冬季はほとんど人が「動かない」のだそうだ。すると4月から11月初めまでが実質的な稼働時期である。半年近く人の動きがないのは運営的に打撃が大きいだろう。しかし、年間入場者が5万人を超える文学館は全国で10館もないはず、とのことで、その基準からみればまずまずの入りといえるだろう。

1日平均での来場客数は150~180人の間というところだ。来場者数の多少は、娯楽施設とは違い、休日だから多く入るというものではなく、企画展の内容によって差が出てくるようだ。

また、高い年齢層の来館者が多数を占めていることから、若者層の来館を促すような企画も検討中だという。例えば今年の夏は若い親子連れをターゲットとした「絵本の広場」という企画展を行い、約9,000人の入場を数えたという。

一方、「熱い文化活動の拠点」を支えるリピーターを増やす施策としては、「仙台文学館友の会」を組織しており、現在300人の会員が集まった。99年度は180人だったので約5割のアップで、絶対数はまだ小さいが、順調に増えているといえるだろう。

友の会の中身だが、会費は普通会员が2,000円、賛助会員は一口5,000円。講演会・講座、研究会・見学会などの実施と会報を発行しており、会員は会員証の提示で文学館に無料で入館できる。また、さまざまなイベントに無料もしくは優待価格で参加できるほか、会報が配布される。

また、常設展だけでリピーターを増やすのは難しいため、企画展にも注力している。基本的

企画展示室で開催されていた「金子みすずの世界展」。



には学芸員自らが企画を立てるが、全国に文学館が増えてきて、新聞社によるパッケージされた企画展がビジネスとして成立するようになってきた状況から、これが今後の企画展の中心となる。

となみに、我々が訪問した際に開催されていた「金子みすゞ展」は朝日新聞社の企画であった。

こういった企画展については、ニーズがあり、経費も内部で準備するものと大差ないなら、却って手間が省け、本来の調査・研究の方に尽力できるという意味で評価できる。全ての企画展が外部持ち込みでは問題があるだろうが、ある程度の頻度は許容する。今後、文学館に力がついてきたら、独自の企画展を他の文学館へ巡回させることも可能になるのではないかと、この構想を持っている。

授業の一環として見学に来るような教育の現場での利用例は少なく、それよりも教師が見学に来るケースが多いという。そこで、中学、高校の国語研究部会の方々に利用してもらえるよう、働きかけている。いずれ、国語の授業で利用できるような副読本の製作を手がけたいと考えているようだ。

おみやげに関しては、大規模なミュージアムショップの設置を計画していたが、今回は見送られた。

関心のない人が来館しないのは仕方がないことであるが、文学好きな人にはどのようにアピールしていくのか、ここがポイントである。展示内容は基本的にはすでに評価の定まった文学者のみを扱っているため、現在活躍している作家の扱いをどうするか、という課題も出てくる。

今回お話を伺った同館の境洋文副館長は、理想的な文学館とは、図書館機能も加わったものではないかとおっしゃっていた。展示を見て興味を持ち、作品を読んでみようという気になったら図書コーナーへ行ってみる、という流れができれば、という。

[次へ](#) 



空間  
通信  
[トップ](#)

## 「仙台文学館」レポート

## 3. 訪問してのインプレッション

## 1) 外観

仙台駅から続く、非常に交通量の多い幹線道路沿いに同館はある。門から見ると深い緑の中に長く、白い建物が横たわっている。これが文学館なのだろうか？むしろ現代的なデザインが森の中でそれがかえって面白い第一印象となった。取材アポイントの時間まで少し時間が空いたので、周囲の公園を散策してみた。

正面入口へのメインアプローチは、ブリッジ状の建物の下をくぐり、さらに奥の公園まで続いている。途中からその道は橋に変わる。下は浅い池、と言おうか、水たまりと言おうか、大きな石が無造作に？置かれた親水空間となっていた。朝9時前ということもあり、ほとんど人はいない。途中、犬の散歩に来ている何人かとすれ違ったくらいである。建物をくぐり抜けると、そこはもう“森の中”である。前面に交通量の多い道路があるとは思えないほど、鳥の声ばかりが聞こえてくる、静けさに包まれた環境だった。

建物は、1階は入口が左手にあり、その真上には丸い吹き抜けが見える。中央を通路が突っ切っている。外観だけでは横に細長いだけに見えるが、実は複雑な構造になっているようだ。

さらに奥へ行くと、道の脇には手入れの行き届いた樹木や大きな灯籠があり、前方はこんもりと茂った森が広がっている。道の右手を見ると、丸い、舞台のような、石づくりのスペースがあった。広さは直径15メートルくらいだろうか。その回りは小川が流れている構造らしい。らしいというのは、残念ながら汚水が淀んでいるだけであった。ちょっと見ただけではここが何を示すのか、どんな機能があるのかさっぱり想像がつかない。子供たちを呼んでお話会でもするスペースだろうか、などと想像していた。ところが、ここはいまのところ何にも使われていないことが判明した。

実はこの丸い“舞台”は、2階の吹き抜けと、1階エントランスロビーと同じ大きさのサークルデザインになっている。意匠デザイン上の“オブジェ”としての性格が強いのだそうである。文学館としても、ここでなにかのイベントができればと思い、電気設備を引いているそうだ。舞台なら観客席が必要となるが、そんなスペースはうまく用意できないわけで、結局まだなにもしたことがない。あくまでもデザイン優先に作られたスペースとなっている。建設概要を紹介したパンフレットにも「石舞台」と明記されているので、舞台を意識して作られたものであるのは確かなようだが、結局中途半端なものになってしまったのではないかと推測される。一般の人が一見しただけではエントランスの円と同じ大きさだとはわからないわけで、設計者の“自己満足”のような気がしてならないのだが。

白い建物が横たわって見える。



深い緑や親水空間が心地よい。



2階吹き抜けから下を見たところ。



## 2) 2階

では、中の様子をご紹介します。

2階に相当するエントランスから入ると、床は足下が少しグラグラとするような、なんとも不思議な感触の素材が敷き詰められていた。これは木材で作られたタイルを、それぞれを接着せずわざと隙間を少し空けて敷き詰めているためである。歩くと木と木がぶつかり合い、乾いた軽やかな音がする。これもまた、外の自然との連続性を意識したデザインとのことである。音がうるさい、ぐらぐらして気持ちが悪い、という声もあって賛否両論なのだそうだが、私個人としては音も感触も心地よいものだった。ちなみにこれは2階のエントランスの部分だけの演出である。

エントランスを入ると左に木造の階段と喫茶室、右には大きなモニターといくつかのベンチが並べられており、その奥には先ほど下から見上げた丸い吹き抜けが見える。全体が白で統一され、清潔感に溢れている。エントランスはそのスペースを利用して講習会、お話し会などのイベントが行われることもあるそうだ。その他、講習室もあり、ここは一般にも貸し出されていて、市民のさまざまな活動に対応している。

モニターの奥は交流コーナーになっている。ここはイスとテーブルが並べられたスペースにすぎないのだが、全面に使ったガラスから降り注ぐ太陽光を受けて読書や打ち合わせをしたりと、自由に利用できる。私たちはここでインタビューを行ったのだが、ガラスから木々の緑が見え、非常に気持ちのよい雰囲気で取材できた。ただ残念だったのが、吹き抜けから下の駐車場が見えてしまうことだった。吹き抜けの真下は先程歩いた遊歩道と親水空間になっているのだが、建物の軒下は駐車場にもなっていて、それがガラス越しに見えてしまうのである。ここまで意匠にこだわって作られた建物なのに、こういうところまでは気が回らなかったのか、それともそのことに関しては特に問題なしと考えたのだろうか。

交流コーナーと吹き抜けを挟んで反対側に、情報コーナーが設けられている。ここには本棚が3つと閲覧席があるほか、ビデオによって文学が学べるブースと、情報が検索できるパソコンを4台設置していた。書籍の貸し出しとコピーサービスも行っている。その本棚だが、書籍があまり収蔵されておらず、スカスカだったのが気になる。いまのところ日本文学全集や関連図書ならば読むことができるそうだ。

情報コーナーの脇に3階への階段があったが、「関係者以外利用禁止」になっていた。本来は来館者も利用できる階段だったそうだが、諸事情により現在は使っていないとのことである。というわけでこの階段は使わず、エントランス近くの階段で3階へ。

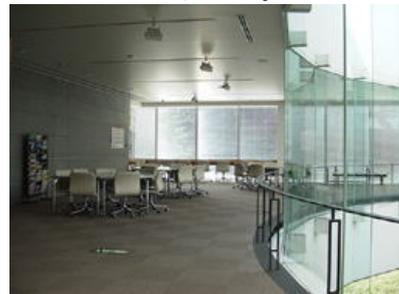
2階エントランスの様子。



エントランス近くにあるモニター。



交流コーナー。この日はまだ誰も交流していなかった。

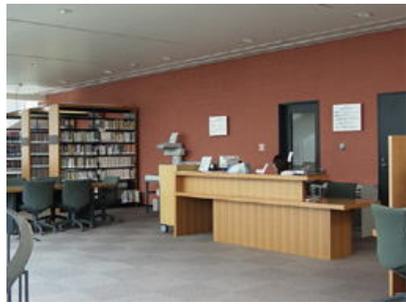


情報コーナー。

検索ができるパソコン。

ン。





[次へ](#) 



空間  
通信  
[トップ](#)

## 「仙台文学館」レポート

## 3) 3階

3階は常設展示室と企画展示室がある、同館のメインとなるフロアである。階段を上ると受付があり、右に進むと常設展示室である。その入口から続く通路に壁を和紙で飾り、その裏から柔らかい光を透過させて、和の囲気を醸し出す工夫を施した導入アプローチとなっている。通路の終点では、天井から吊された和紙に映像や詩の一節の画像を映していた。このように導入部分はなかなかアーティスティックなコーナーとなっていた。

常設展示室への通路。光が美しい。



さて、肝心な展示室であるが、第一印象は「これだけ？狭〜い」というものだった。他にも部屋があるのかと思ってしまうほど、そこは狭く感じられた。そして壁とガラスケースを使った展示は、展示物の密度が高く、ごちゃごちゃとしたカンジを受ける。特に壁を使った展示は一つのコーナーに多くの情報を盛り込み過ぎである。顔写真と作品の一節と書籍の表紙と解説が「渾然一体」と、しかもメリハリなく貼られている。また、柱がで動線を区別しているため、室内はなおさら狭く感じられた。

「学都に集う」コーナー。壁面にぎっしり。



ガラスケースの中には、作品が発表されたころの書籍などが並べられていた。その他、壁の大きなガラスケースには書が掛けられていた。

展示は4つのテーマに分かれている。

「新しき詩歌の時代」コーナーは日本近代詩の礎となった落合直文、島崎藤村、土井晩翠の3人の生涯と作品について紹介。ひとりにつきひとつの壁展示とガラスケースというレイアウトである。それぞれの代表作の紹介の他に、作品内に出てくる仙台とのかかわりに関する記述、仙台で過ごした時の写真、縁の深かった人の写真などが展示の中心となっている。

「学都・仙台の青春群像」コーナーは、明治期に仙台に創設された数多くの学校で学んだ文学者たちを紹介している。真山青果、魯迅、高山樗牛、岩野泡鳴、押川春浪、前田河広一郎、ぬやまひろし、富永太郎といった文学者のほか、多くの俳人たちが青春時代に仙台で学んでいたことを紹介している。

土井晩翠の展示コーナー。これで全て。



「学都に集う」コーナーは学問と芸術を育んだ仙台の学都としての気風を紹介するコーナーで、仙台や宮城にあった学校の教授や教育者、文芸誌の活動などを紹介。「ミッションの精神」「文人サロン」「みやぎの文芸誌」の3つで構成されている。非常に多くの文学者と文芸誌が紹介されていて、宮城は非常に文学が盛んだったことがうかがえた。

斜めに貼る展示を多用している。

そして「うたのことばに生きて」コーナーは大正から昭和にかけて活躍した詩人、歌人の紹

介と、子供のための童謡専門誌「おてんとさん」を中心に、宮城で活躍した童謡詩人の活動が展示されている。童謡のコーナーはパーテーションで仕切られていて、他のコーナーから独立している。そして、明治時代の尋常小学校をほうふつさせる往時の机と椅子が設置され、モニターに映し出された影絵が見られるコーナーを併設している。また、音声で童謡を流し、実際に聞くこともできる。



個人的なことで恐縮だが、私は大学で日本文学を専攻していた。普通の人よりは、ある程度文学の知識はあると自負しているが、ここで紹介されている文学者のラインナップを見ると、私の不勉強を思い知った。作品どころか名前すら知らない作家が何人もいて、一般受けするような著名人は少ないかな、という印象を持った。

副館長が「スーパースターがいない」とおっしゃられていたのもうなずけよう。しかし、当然ながら有名な文学者だけが優れた作品を残したわけではなく、独特の活動をし、並はずれた作品を残した人が仙台にいた、という発見があれば、地域の文学館として大変意義のあるものになるはずである。しかし、この展示でその発見意欲を高める事ができるかという疑問である。多くの内容を学ぼうとしても、どうしても見づらい展示になってしまい、メリハリがつかないのである。たくさんの文学者がいて、いろいろな活動をしてきたんだなあ、という全体的でおおまかな内容でしか捉えにくいのである。

もちろん、こういった展示でも興味を持つ来館者はいるはずで、ではさらに深く知りたい場合に参考に見られるようにと、机と椅子の上に設置しているファイルはどのような内容になっているのか、いくつか開いてみる。しかし、ワープロで打った詩が何編か入っている程度だった。作品に触れることが最も深い理解につながるのには確かだが、理解の助けとなるものとの説明から、興味深い解説が加えられている内容を想像していたので、全くの期待はずれではあった。もちろん、全てのファイルを開いてみたわけではないので、そう決めつけるのは失礼かも知れないが、取材の際に副館長からお聞きしていた「文学を展示するということの難しさ」を実感することとなってしまった。

隣の企画展示室で行われていた「金子みすゞの世界」は、同館の企画展示ではないので見学しなかったが、中年の女性を中心にかなりの来館者が来ていたようだった。一方、常設展示室は、中高年の方が数人、平日の昼間にもかかわらず熱心に見ている状況であった。

展示室を後にして、螺旋階段を使って2階へ戻る。この階段は木で作られていて、青い点字ブロックが付けられていた。点字ブロックはたいてい黄色だが、木目の上に付けると色が沈んでしまうとの理由から青にしたそうである。白と木目調を主体にしたカラーリングの館内で、水色に近い明るい青の点字ブロックは、デザインよりも、バリアフリーを優先したようである。

1階の喫茶室には、昼時だったせいか、多くの客があつてランチを取っていた。この日は仙台市民で構成している「公共施設を見学する会」が視察に来ていたので、その方々だったのかも知れない。

企画展示室の入り口。  
ブルーのラインは点字ブロック。



螺旋階段



喫茶室。このときはまだ準備中。

このように、建物は凝った造りで、どこを切り取っても絵になるデザインだったが、肝心の文学館としては残念ながらあまり機能していないとの印象を持つことになってしまった。施設の見た目よりも、本来の目的である常設展示室の充実を第一に図るべきである。「自然との共存」「市民の憩いの場」としての役割はこの次だ。デザイン優先となりがちな公共施設の姿をまたひとつ見ることになってしまったようだ。



[次へ](#) 



空間  
通信  
[トップ](#)

「仙台文学館」レポート

4) ミュージアムグッズ等

同館にミュージアムショップはないが、受付でオリジナルグッズなどを販売している。常設展示室の「うたのことばに生きて」コーナーで紹介されていた、童謡雑誌「おてんとさん」の表紙絵をデザインしたオリジナルハガキ、同館のロゴデザイン入り便箋などを販売していた。最近、おみやげとしてよく見かける「マウスパッド」などではなく、便箋・ハガキなどの品揃えに、どことなく文学館らしさを感じた。

ガイドブックは50ページほどの冊子だが、非常に充実した内容で、常設展示室の内容が全て掲載されているのではないと思うほどである。この1冊で仙台の、そして宮城の文学の概要を掴むことができるものなので、同館を訪れた際には、ぜひとも購入をお勧めしたい。

その他、過去に開催された企画展のカタログも販売されていて、開館記念特別展であった「夏目漱石展」のカタログを購入してみた。東北大学附属図書館には「漱石文庫」と呼ばれる、夏目漱石の蔵書を一堂に集めた資料室があることから、開館の際に夏目漱石展が開催された経緯がある。このカタログもまた、漱石が愛用した書籍やノートが数多く紹介されており、興味深い内容となっていた。

「おてんとさん」の表紙をデザインしたオリジナルハガキ。



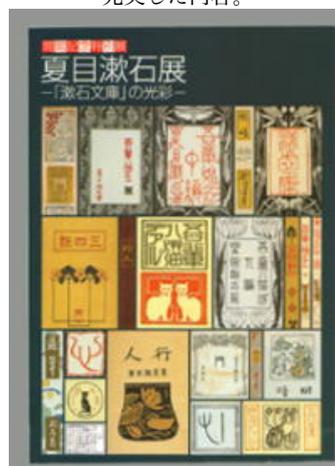
オリジナル便箋。表紙は同館のロゴがデザインされている(上)。便箋は原稿用紙になっている。(下)



ガイドブック



「夏目漱石展」のカタログ。充実した内容。



4. まとめ

さて、改めて館長の言葉を思い返してみると、残念ながら市民がお互いを刺激しあい、熱を発するような活動はまだ生まれていないし、その胎動が聞こえるようになるにもまだ時間がかかるだろう。

コンセプトのように、同館が文化の発展拠点となるには、今後、常設展示の充実もあろうが、まずは文学館の認知を高めるため、文学者たちを展示するだけでなく、さまざまなイベントも必要になりそうだ。

文人サロンや文芸誌が再びたくさん生まれるような文化を醸成する。それを実現するのは、実は市民のパワーなのである。

 [仙台文学館TOPに戻る](#)

